

第2回研究会合同イベント

ところ定まれば、こころ定まる！

「“丁々発止語り合う会” コミュニティ学のスズメ」報告

「コミュニティ学」は濱口研究会の集大成



2016年3月26日(土)14:00~16:35に日本労働者協同連合会8階会議室にて、参加者数40名(会員32名、非会員8名)で開催されました。

一般財団法人シニア社会学会の5つの研究会による合同研究会第2回目となります。昨年第1回は長田研究会の「福島の問題を取り上げ、今回は研究会の中の最老舗、濱口研究会が担当してテーマは「コミュニティ」でした。素材は同研究会が「シニア社会のリテラシー研究会」の集大成として3月に上梓したばかりの『コミュニティ学のス

ズメ』(濱口晴彦編著、株式会社日本地域社会出版刊)。

袖井会長は開会挨拶のなかで、「国も、自治体もお金がなくて、コミュニティが社会保障等生活を守るのに頼りにされる」とコミュニティの重要性に言及された。

プログラムは濱口座長による問題提起からはじまった



「コミュニティの基本的な要件は人とひとのつながり、関わりを言っている」今の日本は政治的な観点からは憲法第9条が脅かされ、社会的問題として少子高齢化と人口減少、エネルギーの問題、そしてグローバル化が進み経済的・社会的な格差の問題がコミュニティに影を落としている」「ひとは生きている限り生き続けるゆえにコミュニティを必要とする、コミュニティがすべてを支えている。そこでは生命と生活の乖離が生じている」「価値判断の異なる人が協同して知恵を働かせ、先記のような課題を克服し発展させることでコミュニティを持続できる」…という問題提起があった。

司会の碓正義さんは、いみじくも「先生の話は後ろ側に膨大な知識があり、消化して要約するのが難しい」と吐露された。その意味で上記の趣旨要約も怪しいことになるけれど…。



さて、碓さんは、コミュニティのエッセンス「ところ定まれば、こころ定まる」を「つながる場所があれば、つながる力が生じる。必要なのはつながる力だ」と簡明に解釈された。

ハイライトは会員4人の現場からの報告



駒宮淳子さんの報告「ところ定まらぬ避難者の居場所づくり」。東日本大震災にいてもたってもいられず一人で始めた避難者の支援活動。避難者に寄り添い、4年間の「ふるさと交流サロン」活動を経て、自立支援の「結の会」に発展させてきました。



佐藤敬さん発表の主題は『「よそ者」になった団塊サラリーマン』。定年再雇用の60歳から九州の地方都市に「よそ者」の「地域ブランドマネージャー」として単身赴任し、チャレンジした報告。素のままの自分をだして、個人と個人で向き合ったからこそ地域に受け入れられた体験。よそ者ならではの強みと弱み、地域コミュニティの多様性・重層性など教訓に富んだ聞きごたえのある発表でした。



杉山由美子さんの現場からの報告は『ワーカーズコープ』、『ナルク』によるコミュニティへの働きかけ。著名で活動実績も豊富な2つの団体へのフリーランサーならではのインタビューに基づく報告。社会的弱者になりがちな人たちのために「共に働き、ともに生きる 地域をつくる」をモットーにしてきたワーカーズコープ。ナルクの特徴は時間預託制。会員同士の交流も盛んだが、ナルク水戸支部で多いボランティア活動は車の送迎、家事手伝い、草むしり等。いずれも、定年後地域に溶け込んで活躍するアクティブシニアの現状が伝わってきました。



福元公子さんは「地域社会を支える新たな役割としての介護保険制度と成年後見制度の現況」報告。本人の判断能力が精神上の障害により不十分な場合に本人を法的に保護し、支えるための制度。財産管理（不動産、預貯金、保険契約、定期的な収入等）と身上監護（介護等福祉サービス、施設入所、医療・入院、税金の申告・納付等）を行う。本人を中心に輪を囲むように配偶者・家族、親戚・友人、遠くにいる家族・同僚や上司・近隣者・そして専門家が護送船団を組むように保護し支える制度としてコンボイの構造が説明された。

濱口座長は4人の事例報告を、駒宮さんの場合はコミュニティの「甦生」、佐藤さんは「創生」、杉山さんは「維持」、福元さんは「克服」への取り組みであると分類された。

4つの研究会代表コメントが問題の本質を深堀

合同研究会を象徴するように、報告に対応する形で4つの研究会の代表からそれぞれコメントがあった。「社会保障研究会」からは袖井会長が代表コメンテーターとして登場。認知症等判断能力が不十分な人が増え、法律面では司法書士によるリーガルサポートセンターもあるが多くの人が困っていると成年後見制度を評価された。他方で「成年後見制度でできないことは何ですか？」と質問なされた。時間不足で意のある所を尽くせなかった福元さんは待っていましたとばかりに、手術の場合、居住用不動産管理等制度の曖昧部分について補足説明をされた。質問で上手く聞き手の疑問を解くのもコメンテーターの大事な役割と教えられました。

「災害と地域社会研究会」からは長田座長が代表コメント。コミュニティとは何かとはっきりした解答が出されないのが現代社会。構造が変化して人のつながりがどうなるのか、克服すべき生活課題も多岐にわたる。それでも関わらざるを得ないのがコミュニティの問題なのだと諭された。駒宮さんの事例は、災害による避難問題で異質な人と対立を解決し共生状態に到達しても、また次の問題が発生する循環の中でコミュニティを捉えていると評価された。長田座長には福島の問題の研究成果を踏まえたコメントも頂きました。『ところ定まればころ定まる』が脅かされる要因の一つが災害、災害でどころも人の心も動揺します。被害者の尊厳に配慮し、我々も加害者の一部であると自問自答しながら考えて行かなければならない」と。

「シニアのICT研究会代表の森さんは「よそ者」に注目された。よそ者ながら地域に溶け込み、強み、弱みを自覚し、周到な準備で自前のコミュニティを創り上げた佐藤さんの活動過程に対して独自の解釈を加えながら、さらに深い理解へと誘い込んでくださいました。

「ガバナンス研究会」の代表コメンテーターは川村座長でした。社会保障・福祉が専門であり、本日の報告関係部署とも縁の深いところからのコメントでした。コミュニティとは地域社会で、5分以内の所が生活の根拠地となっている。市民社会組織はアソシエーションだと述べられた。これからのコミュニティは行政に頼らず、自らが参画し共同して地域を動かすようであればならない。その実現がシニア社会学会の課題であり、進めるべきはコミュニティワークであるという。そうすればコミュニティは終の棲家になるのだという主張でした。

残された短い時間の中、会場からも3人の貴重なコメントがありました。

濱口座長の総括

コミュニティは既に日常用語となっています。コミュニティを呑み込んでいるのがアソシエーションでその状態をブレンドコミュニティと呼ぶことができます。アソシエーションなコミュニティは集団であっても個を許容しているのが特徴です。Aging in Placeという言葉があります。今いるところで老いて行くという意。色つや、ぬくもり、輝きがあるコミュニティを創っていけば、そこがAging in Placeになります。

反省して次回につなげる

アンケート結果(40名中24名の回収)によればイベントの全体評価は「満足」が18名中13名。「濱口座長の問題提起」、「執筆者4名の現場からの事例」、「各研究会代表によるコメント」のそれぞれが「関心」を呼びかつ「印象に残り、参考になった」といい評価を得ていました。各研究会座長による的確なコメントも成功に導く要因となりました。問題は運営上のこと。「発表及び質問の時間が圧倒的に短いので丁々発止の議論になっていない」が典型的な意見。「マイクが使える会場は必要、全然聞こえなかった人がいた」も反省点。

急きょ開催した懇親会は参加者相互の懇親と親しく意見交換ができる場として効果的でした。

研究会合同イベントは、周到的な事前準備と発表・討議の適切な時間配分、そして学会挙げて協力する体制が大事なことを再確認させてくれました。(文責 安田)